

# 前

## 入学試験問題

### 国語（文科）

（配点一二〇点）

平成三十一年二月二十五日 九時三〇分～一二時

#### 注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で十九ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号（表面二箇所、裏面一箇所）、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 十、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。



草稿用紙  
(切り離さないで用いよ。)

## 第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

「カオスの縁」という言葉をご存知だろうか？ この「カオスの縁」とは、一九六〇年代から行われているセル・オートマトンと呼ばれるコンピュータ上のプログラムを使った研究が端緒となり提唱された概念である。とても大雑把に言えば、二つの大きく異なった状態(相)の間には、その両側の相のいずれとも異なった、複雑性が非常に増大した特殊な状態が現れる、というようなことを指している。

身近なイメージで言えば、水<sup>水</sup>を挙げられるだろうか。ご存知のように、水は気体・液体・固体という三つの形態をとる。たとえば気体の水蒸気は、水分子の熱運動が大きくなり、各分子が分子同士の結合力の束縛から放たれ、空間の中で自由気ままに振舞っている非常に動的な姿である。一方、氷は水分子同士が強固に結合し、各分子は自身が持つ特性に従って規則正しく配列され、理にかなった秩序正しい形を保っている静的な状態だ。

その中間にある液体の、いわゆる水<sup>水</sup>は、生命の誕生に大きく<sup>a</sup>コウケンしたと考えられる、柔軟でいろんな物質と相互作用する独特な性質を多数持つている。水蒸気とも氷ともかなり異なった特性である。この水<sup>水</sup>の状態では水分子が存在できる温度範囲は、宇宙のスケールで考えるなら、かなり狭いレンジであり、実際水<sup>水</sup>を<sup>煮</sup>えた星はそうそう見つからない。巨視的に見れば、水<sup>水</sup>は分子同士が強固に束縛された氷という状態から、無秩序でカオス的に振舞う水蒸気という状態への過渡期にある特殊な状態、すなわち「カオスの縁」にある姿と言えるのかもしれない。

この「カオスの縁」という現象が注目されたのは、それが生命現象とどこかつながりを感じさせるものだったからである。生き物の特徴の一つは、この世界に「形」を生み出すことだ。それは微視的には有機物のような化学物質であり、少し大きく見れば、細胞

であり、その細胞からなる我々人間のような個体である。そして、さらに巨視的に見れば、その個体の働きの結果できてくるアリ塚であつたり、ビーバーのダムであつたり、東京のような巨大なメガロポリスであつたりする。

しかし、こういった生物の営みは、自然界ではある意味、例外的なものである。何故なら、この世界は熱力学第二法則（エントロピー増大の法則）に支配されており、世界にある様々な分子たちは、より無秩序に、言葉を変えればカオスの方向へと、時間と共に向かつているはずだからである。そんなカオスへ向かいつつある世界の中で、「形あるもの」として長期間存在できるのは、一般的に言えば、それを構成する原子間の結合が極めて強いものであり、鉱物や氷といった化学的な反応性に乏しい単調な物質が主なものである。

ところが、生命はそんな無秩序へと変わりつつある世界から、自分に必要な分子を取り入れ、そこに秩序を与え「形あるもの」を生み出していく。その姿はまるで「カオスの縁」にたたずみ、形のないカオスから小石を拾い、積み上げているかのようなのである。また、その積み上げられる分子の特徴は、鉱石などと違い、反応性に富んだ物質が主であり、「不動」のものとして作り出されるのではなく、偶発的な要素に反応し、次々に違う複雑なパターンとして、この世に生み出されてくる。そして、それらは生命が失われれば、また形のない世界へと飲み込まれ、そこへと還つていくのだ。それは分子の、この世界における在り方という視点で考えれば、「安定」と「無秩序」の間に存在する、極めて特殊で複雑性に富んだ現象である。

また、生命の進化を考えてみよう。進化は、自己複製、つまり「自分と同じものを作る」という、生命の持続を可能とする静的な行為と、変異、つまり「自分と違うものを作る」という、秩序を破壊する、ある種、危険を伴った動的な行為の、二つのベクトルで成り立っている。現在の地球上に溢れる、大きさも見た目も複雑さもその生息も、まったく違う様々な生命は、その静的・動的という正反対のベクトルが絶妙なバランスで作用する、その「はざま」から生まれ出てきたのだ。

生命は、原子の振動が激しすぎる太陽のような高温環境では生きていけないし、逆に原子がほとんど動かない絶対零度のような静謐な結晶の世界でも生きていけない。この単純な事実を挙げるまでもなく、様々な意味で生命は、秩序に縛られた静的な世界と、形を持たない無秩序な世界の間<sup>1</sup>に存在する、何か複雑で動的な現象である。「カオスの縁」、つまりそのはざまの空間こそが、

生命が生きていける場所なのである。

「生きている」科学にも、少しこれと似た側面がある。科学は、混沌こんとんとした世界に、法則やそれを担う分子機構といった何かの实体、つまり「形」を与えていく人の営為と言える。たとえば、あなたが街を歩いている時、突然、太陽がなくなり、真つ暗になつてしまつたとする。一体、何が起つたのか、不安に思い、混乱するだろう。実際、古代における日食や月食は、そんな出来事だつた。不吉な出来事の予兆とか、神の怒りとして、恐れられてきた歴史がある。

しかし、今日では日食も月食も物理法則により起る現象であることが科学によつて解明され、何百年先の発生場所、その日時さえ、きちんと予測することができる。それはある意味、人類が世界の秩序を理解し、変わることはない「不動」の姿を、つかんだということだ。何が起つたのか訳が分からなかつた世界に、確固とした「形」が与えられたのだ。

一方、たとえばガンの治療などは、現在まだ正答のない問題として残されている。外科的な手術、抗ガン剤、放射線治療。こういった標準治療に加えて、免疫療法、鍼灸しんきゅう、食事療法などダイタイ医療と呼ばれる療法などもあるが、どんなガンでもこれをやれば、まず完治するというような療法は存在しない。そこには科学では解明できていない、形のはつきりしない闇のような領域がまだ大きく広がっている。しかし、この先、どんなガンにも効果があるような特効薬が開発されれば、ガンの治療にはそれを使えば良い、ということになるだろう。

それは、かつてサイキンの感染症に対して抗生物質が発見された時のように、世界に新しい「形」がまた一つ生まれたことを意味することになる。このように人類が科学により世界の秩序・仕組みのようなものを次々と明らかにしていけば、世界の姿は固定され、新たな「形」がどんどん生まれていく。それは人類にもたらされる大きな福音だ。

しかし、また一方、こんなことも思うのだ。もし、そうやって世界の形がどんどん決まっていき、すべてのことが予測でき、何に対しても正しい判断ができるようになったとして、その世界は果たして、人間にとつてどんな世界なのだろう？ 生まれてすぐに遺伝子診断を行えば、その人がどんな能力やリスクを持つているのか、たちどころに分かり、幼少時からその適性に合わせた教育・訓練をし、持ち合わせた病気のリスクに合わせて、毎日の食事やエクササイズなども最適化されたものが提供される。結婚相

手は、お互いに遺伝子型の組合せと、男女の相性情報の膨大なデータベースに基づいて自動的に幾人かの候補者が選ばれる。

科学がその役目を終えた世界。病も事故も未知もない、そんな神様が作ったユートピアのような揺らぎのない世界に、むしろ「息苦しさ」を感じてしまうのは、私だけであろうか？

少なくとも現時点では、この世界は結局のところ、「分からないこと」に覆われた世界である。目をつぶって何かに、それは科学であれ、宗教であれ、すがりつく以外、心の拠りどころさえない。しかし、物理的な存在としての生命が、「カオスの縁」に立ち、混沌から分子を取り入れ「形」を作り生きているように、知的な存在としての人間はこの「分からない」世界から、少しずつ「分かること」を増やし「形」を作っていくことで、また別の意味で「生きて」いる。その営みが、何か世界に「新しい空間」を生み出し、その営みそのものに人の「喜び」が隠されている。そんなことを思うのだ。

だから、世界に新しい「形」が与えられることが福音なら、実は「分からないこと」が世界に存在することも、また福音ではないだろうか。目をつぶってしがみつける何かがあることではなく。

「分からない」世界こそが、人が知的に生きていける場所であり、世界が確定的でないからこそ、人間の知性や「決断」に意味が生まれ、そして「アホな選択」も、また許される。いろいろな「形」、多様性が花開く世界となるのだ。それは神の摂理のような、真実の世界と、混沌が支配する、無明の世界とのほさまにある場所であり、また「科学」と、まだ科学が把握できていない「非科学」のほさま、と言い換えることができる空間でもある。

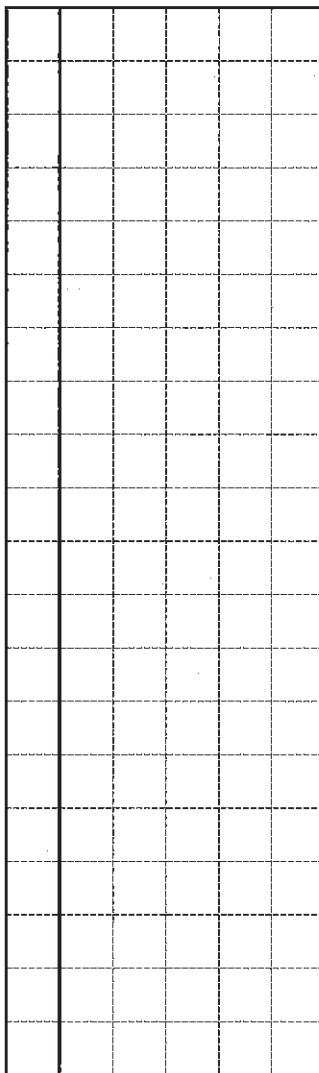
(中屋敷均「科学と非科学のほさま」による)

設問

- (一) 「自然界ではある意味、例外的なものである」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (二) 「何か複雑で動的な現象」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「人類にもたらされる大きな福音」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
- (四) 「いろんな『形』、多様性が花開く世界」(傍線部エ)とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字として数える)。
- (五) 傍線部 a・b・c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。
- a コウケン      b ダイタイ      c サイキン



草  
稿  
用



## 第二 一 問

次の文章は、蘭更編『誹諧世説』の「嵐雪が妻、猫を愛する説」である。これを読んで、後の設問に答えよ。

嵐雪が妻、唐猫のかたちよきを愛して、美しきふとんをしかせ、食ひ物も常ならぬ器に入れて、朝夕ひざもとをはなざりけるに、門人・友どちなどにもうるさく思ふ人もあらんと、嵐雪、折々は、「獣を愛するにも、程あるべき事なり。人にもまさりたる敷き物・器、食ひ物とても、忌むべき日にも、猫には生ざかなを食はするなど、よからぬ事」とつぶやきけれども、妻しのびてもこれを改めざりけり。

さてある日、妻の里へ行きけるに、留守の内、外へ出でざるやうに、かの猫をつなぎて、例のふとんの上に寝させて、さかななど多く食はせて、くれぐれ綱ゆるさざるやうに頼みおきて出で行きぬ。嵐雪、かの猫をいづくへなりとも遣はし、妻をたばかりて猫を飼ふ事をやめんと思ひ、かねて約しおける所ありければ、遠き道を隔て、人して遣はしける。妻、日暮れて帰り、まづ猫を尋ぬるに見えず。「猫はいづくへ行き侍る」と尋ねければ、「されば、そのあとを追ひけるにや、しきりに鳴き、綱を切るばかりに騒ぎ、毛も抜け、首もしまるほどなりけるゆゑ、あまり苦しからんと思ひ、綱をゆるしてさかななどあてけれども、食ひ物も食はで、ただうろうろと尋ぬるけしきにて、門口・背戸口・二階など行きつ戻りつしけるが、それより外へ出で侍るにや、近隣を尋ぬれども今に見えず」と言ふ。妻、泣き叫びて、行くまじき方までも尋ねけれども、帰らずして、三日、四日過ぎければ、妻、袂をしばりながら、

猫の妻いかなる君のうばひ行く 妻

かく言ひて、ここちあしくなり侍りければ、妻の友とする隣家の内室、これも猫を好きけるが、嵐雪がはかりて他所へ遣はしける事を聞き出だし、ひそかに妻に告げ、「無事にて居侍るなり。必ず心を痛め給ふ事なかれ。我が知らせしとなく、何町、何方へ取

り返しに遣はし給へ」と語りければ、妻、「かかる事のあるべきや。我が夫、猫を愛する事を憎み申されけるが、さては我をはかりてのわざなるか」と、さまざま恨みいどみ合ひける。嵐雪もあらはれたる上は是非なく、「実に汝をはかりて遣はしたるなり。常々言ふごとく、余り他に異なる愛し様なり。はなはだ悪しき事なり。重ねて我が言ふごとくなさずば、取り返すまじ」と、さまざま争ひけるに、隣家・門人などいろいろ言ひて、妻にわびさせて、嵐雪が心をやはらげ、猫も取り返し、何事なくなりけるに、

睦月はじめの夫婦いさかひを人々に笑はれて

喜ぶを見よや初ねの玉ばは木 嵐雪

〔注〕 ○嵐雪——俳人。芭蕉の門人。

○唐猫——猫。もともと中国から渡来したためこう言う。

○門口・背戸口——家の表側の出入り口と裏側の出入り口。

○内室——奥様。

○玉ばは木——正月の初子の日に、蚕部屋を掃くために使う、玉のついた小さな箒。

設  
問

- (一) 傍線部ア・イ・カを現代語訳せよ。
- (二) 「行くまじき方までも尋ねけれども」(傍線部ウ)を、誰が何をどうしたのかわかるように、言葉を補い現代語訳せよ。
- (三) 「我が知らせしとなく、何町、何方へ取り返しに遣はし給へ」(傍線部エ)とあるが、隣家の内室は、どうせよといっているのか、説明せよ。
- (四) 「さては我をはかりてのわざなるか」(傍線部オ)とあるが、嵐雪は妻をどうだましたのか、説明せよ。
- (五) 「余り他に異なる愛し様」(傍線部キ)とあるが、どのような「愛し様」か、具体的に説明せよ。

草  
稿  
用  
紙  
(切り離さないで用いよ。)

### 第三 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

学校<sup>ハ</sup>所以<sup>ニ</sup>養<sup>フ</sup>士<sup>ヲ</sup>也。然<sup>レドモ</sup>古<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>聖<sup>ノ</sup>王<sup>、</sup>其<sup>ノ</sup>意<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>僅<sup>ク</sup>此<sup>ニ</sup>也。必<sup>ズ</sup>使<sup>メ</sup>治<sup>ム</sup>天下<sup>ヲ</sup>

之<sup>ヲ</sup>具<sup>シテ</sup>皆<sup>デ</sup>出<sup>デ</sup>於<sup>テ</sup>学<sup>校</sup>、而<sup>ル</sup>後<sup>ニ</sup>設<sup>ケル</sup>学<sup>校</sup>之<sup>ノ</sup>意<sup>ハ</sup>始<sup>メテ</sup>備<sup>ハル</sup>。天<sup>子</sup>之<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>是<sup>トスル</sup>、未<sup>ダ</sup>必<sup>ズ</sup>是<sup>ナラ</sup>、

天<sup>子</sup>之<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>非<sup>トスル</sup>、未<sup>ダ</sup>必<sup>ズ</sup>非<sup>ナラ</sup>。天<sup>子</sup>亦<sup>モ</sup>遂<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>敢<sup>テ</sup>自<sup>ラ</sup>為<sup>ス</sup>非<sup>トス</sup>、而<sup>シテ</sup>公<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>非<sup>トス</sup>、是<sup>レ</sup>於<sup>テ</sup>

学<sup>校</sup>。是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>養<sup>フ</sup>士<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>学<sup>校</sup>之<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>事<sup>、</sup>而<sup>シテ</sup>学<sup>校</sup>不<sup>レ</sup>僅<sup>ク</sup>為<sup>ス</sup>養<sup>フ</sup>士<sup>ヲ</sup>而<sup>シテ</sup>設<sup>ケル</sup>也。

三<sup>ノ</sup>代<sup>以下、</sup>天<sup>下</sup>之<sup>ノ</sup>是<sup>レ</sup>非<sup>トス</sup>、一<sup>ニ</sup>出<sup>ツ</sup>於<sup>テ</sup>朝<sup>廷</sup>。天<sup>子</sup>榮<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>則<sup>ハ</sup>群<sup>趨</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>シ</sup>

是<sup>ト</sup>、天<sup>子</sup>辱<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>則<sup>ハ</sup>群<sup>趨</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>シ</sup>非<sup>ト</sup>。而<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>学<sup>校</sup>者<sup>、</sup>科<sup>擧</sup>鬻<sup>争</sup>、富<sup>シ</sup>

貴<sup>ク</sup>熏<sup>ク</sup>心<sup>ス</sup>。亦<sup>モ</sup>遂<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>朝<sup>廷</sup>之<sup>ノ</sup>勢<sup>利</sup>一<sup>ニ</sup>變<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>本<sup>領</sup>。而<sup>シテ</sup>士<sup>之</sup>有<sup>ル</sup>才<sup>能</sup>学<sup>術</sup>

者<sup>、</sup>且<sup>ツ</sup>往<sup>ツ</sup>往<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>拔<sup>キ</sup>於<sup>テ</sup>草<sup>野</sup>之<sup>ノ</sup>間<sup>、</sup>於<sup>テ</sup>学<sup>校</sup>初<sup>メ</sup>無<sup>レ</sup>与<sup>ス</sup>也。究<sup>ク</sup>竟<sup>キ</sup>養<sup>フ</sup>士<sup>ヲ</sup>一

事亦失<sup>f</sup>之矣。

(黄宗羲『明夷待訪録』による)

〔注〕 ○三代以下——夏・殷・周という理想の治世が終わった後の時代。

○鬪争——騒ぎ争う。

○熏心——心をこがす。

### 設問

- (一) 傍線部 a・d・e の意味を現代語で記せ。
- (二) 「不<sup>三</sup>敢 自 為<sup>二</sup>非 是<sup>一</sup>」(傍線部 b) を平易な現代語に訳せ。
- (三) 「以<sup>三</sup>朝廷之勢利<sup>二</sup>」(傍線部 c) とはどのようなことか、わかりやすく説明せよ。
- (四) 「亦失<sup>レ</sup>之矣」(傍線部 f) とあるが、なぜ「亦」と言っているのか、本文の趣旨を踏まえて説明せよ。

## 第四問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

迷い子になった。

僕が六歳か七歳の時だったと思う。母とふたりで買い物に出掛けた帰り途。乗り慣れた東武東上線の電車の中での出来事だった。車窓の風景を見るのが何より好きだった僕は、座っている母から少し離れたドアの前に立ち、夕暮れの街並みを目で追っていた。風景が止まり、又動き出す、その繰り返しに夢中になっていた僕は視界から遠ざかっていく「下赤塚」という駅名に気付いて凍りついた。それは僕たちが降りるはずの駅だった。あわてて車内を振り返ったが、母の姿は既にそこには無かった。あとになってわかったことだが、乗降客の波に一瞬僕を見失った母は、下赤塚で降りた別の少年を僕と見間違い、改札の外まで追い掛けてしまったらしい。

次の駅で降りれば、そこから家までは小学校の通学路だ。ひとりでもなんとか家に辿り着けるだろう。母はそう考えて、そのまま家へ戻り、夕飯を作りながら僕の帰りを待つことにしたようだ。しかし、車内に残された僕がそのことに気付いたのは、既に電車が次の駅を通過した後だった。その二度目の失敗に余程動揺したのだろう、僕は会社帰りのサラリーマンではぼ座席の埋まった車内をウロウロと歩き始めた。

(どうしようどうしよう)じっとしていることに耐えられず、僕は途方に暮れてただ右往左往を繰り返した。その時の、僕の背負い込んだ不幸には何の関心も示さない乗客たちの姿が強く印象に残っている。それはぞつとするくらい冷たい風景だった。その風景の、僕との無縁さが不安を一層加速させた。そのまま放って置いたら、終点の池袋まで連れて行かれてしまったと思うのだが、途中でひと組の母娘が僕に声を掛けてくれたらしい。らしい、というのはその瞬間は僕の記憶からはスッポリと抜け落ちてしまっているからだ。



記憶の中の次のシーンでは、僕は駅のホームに設けられた薄暗い駅員室のような場所にポツンと座っている。恐らく彼らがかわりそうに思つて僕を連れて電車を降り、駅員を呼んでくれたのだろう。僕はその部屋で母の迎えを待つことになったのだ。すっかり暗くなつてしまつた風景の中、恩人のふたりが、再び電車に乗つて去つていく姿を覚えている。窓ガラス越しに見えた中学生くらいの女の子は（もう大丈夫よ）というように少し微笑んでいた。

母を待つている姿があんまり寂しそうだつたからか、そばにいた駅員が僕の手のひらに菓子を一握らせてくれた。ヌガーだつた。キャラメルのような歯ごたえの、あの白いやつだ。駅員の顔は覚えていない。恥ずかしくてたぶん見られなかつたのだろう。僕はお礼も言わずに、そのヌガーをほおばつた。しばらく噛んでいると甘さの奥にピーナッツの香ばしさが口いっぱい広がつた。美味しかった。ああ……今度このお菓子を母親に買つてもらおうと、その時思つた。その瞬間、僕の中から不安は消えていた。

迷い子になつたときにその子供を襲う不安は、両親を見失つたというような単純なものでは恐らくない。それは、僕のことなど誰も知ることのない「世界」と、そしてその無関心と、否応なく直面させられるという大きな戸惑いである。その疎外感の体験が少年を恐怖の底につき落とすのだろう。自分を無条件に受け入れ庇護してくれる存在の元を離れ、「他者」(それが善意であれ悪意であれ)としての世界と向き合う——人が大人になつていく過程でいずれは誰もが経験しなくてはいけないこのような邂逅を、予行演習として暴力的に体験させられる——それが迷い子という経験なのではないだろうか。だからこそ迷い子は、産まれたての赤ん坊のように泣き叫ぶのだ。たつたひとり世界へ放り出されたことへの恐怖から、これでもかと泣くのだ。そして、どんなに泣いても、もう孤独に世界と向き合つていかななくてはいけないのだと悟つた時、少年は迷い子であることと訣別し、大人になるのだと思う。その時を境にして、母は、自分を包み込んでくれる世界そのものではなく、世界の片隅で自分を待つていてくれるだけの小さな存在に変質してしまう——。かつて迷い子だつた大人は、そのことに気付いた時、今度はこつそりと泣くのである。

あの日の夜、駅まで迎えに来てくれた母のことはどうしたわけか、全く覚えていない。ただ、今でも一緒に電車に乗ると、母はこの時のことを思い出しては「でもほんとうにお前に似た子だつたんだよ、後ろ姿が……」と、申し訳無きような顔を僕へ向けるのである。

(是枝裕和「ヌガー」)

- (一) 「その風景の、僕との無縁さが不安を一層加速させた」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (二) 「その瞬間、僕の中から不安は消えていた」(傍線部イ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。
- (三) 「このような邂逅を、予行演習として暴力的に体験させられる」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
- (四) 「今度はこつそりと泣くのである」(傍線部エ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

草  
稿  
用  
紙

(切り離さないで用いよ。)